「少し、試したいことがある」
乃木若葉や土居球子と同じく、天乃の精霊であり三百年前の西暦時代勇者である郡千景は、鍛錬へと向かおうとした夏凜へと声をかける。手には細長い何かを入れた紺色の袋を持っており、鍛錬で試したいことがあるというのは明白だった
「鍛錬についてくるって事？ 天乃の警護は？」
「今日は球子さんがいる。それに、若葉さんも」
「さん付けはダメって言われるわよ？」
「あ……すみません」
半ば呆れたような物言いだったからか、千景は心からの謝罪を告げるように頭を下げて、謝罪を口にする。夏凜としては、千景が敬語であることに違和感は覚えないのだが、球子と若葉―特に球子―がそれを苦手としており、天乃も出来れば。というので、矯正中なのだが、千景は自分が下にならなければいけないと感じた際は、どうしても敬語での話し方となってしまうらしい
「あんた……そうやって畏まってると日本人形っぽいわ」
「日本人形？ それなら、東郷さ……東郷のほうが近いと思うけれど」
すぐ近くにある窓を見つめた千景は、そこに映る自分の隣に、東郷の姿を幻視して頷く。どう考えても、自分よりそれっぽいはずだ。しかし、夏凜の意見は違うようで「東郷はダメ」と、断言して否定すると困ったように笑ったかと思えば、切なげにため息をつく
「東郷はそれっぽくないのよ。あの体型も悪いとは言わないけど、日本人形のそれとはちょっと違う」
「……それは、つまり。私の体が貧相だと……？」
「あ」
そんな意図は無かったのだが。言われてみれば明らかにそんな意味になってしまう発言で、夏凜は悲しげに自分の胸元に手を宛がう千景を一瞥して、自分の体へと目を向ける。足先まで澄み切った空のように見渡せる
（……ま、私は別に気にならないけど）
少しは憧れを抱くというか、そうなってみたいと思うような時も確かにあった。だが、戦いにおいて無駄な物が無いという利点もあるし、何より恋人と触れ合うときにより密接になれるというのが、夏凜は嬉しいからだ
「千景も千景で、そりゃ。足りないかもしれないけど、それだけじゃないでしょ」
「そう……かしら」
「それが無いからって悩んでたら、ただの卑屈な女になるっての。前見てなきゃ、希望もなにも見えやしない」
悟ったように言う夏凜は、「なにいってんだか」と、少しばかり顔を赤くして「行くわよ」と一足先に歩いていく。その姿を千景は少しだけ見つめて自分の胸を撫で下ろすと、小さく笑みを浮かべて、その後を追った

「あら、今日はまた別の彼女？」
「違うわよ！」
にやにやと笑う教導官である晴海に怒鳴って、深くため息をつく。体つきに関しては、天乃の方が女の子らしい―大人の女性ではなく―なお、やはり姉妹といえど違うところはあるのだが、こういった性格的な部分は、良く似通っている。夏凜と晴海、年齢と立場の違うはずの二人の仲良さげな雰囲気に、千景は嬉しそうな笑みを浮かべて
「仲が良いのね」
「長い付き合いだもの」
晴海は仲が良いといわれたのが嬉しかったのか、普段逸れられているような教導官らしくない、子供のような笑みを見せる。大赦所属の戦技教導官としてはいるが、普段は高校生というのも、信憑性が沸く
「それで？ 貴女は？ 私はもう聞いてるだろうけど、久遠晴海よ」
「私は、久遠さんの精霊で、西暦時代の元勇者の郡千景」
千景【元】の部分を強調して言うと、まっすぐ晴海を見つめて手荷物の袋を外す。出てきたのは百五十センチほどの棒だ。千景の本来の武器は鎌だが、それでは流石に殺傷力が高く、かといって木製の大鎌では強度に難がある。それゆえの選択が、これだった
「晴海教導官、手合わせ願います」
敬語を使っても何も問題が無い。むしろ、そうあるべきという状況だからか、千景は明るい笑みを浮かべて、一礼する。そんな礼儀正しい姿勢に、晴海は満足げな笑みを浮かべると「解ったわ」と、答える。祖母から槍術を教わっている晴海は、系統こそ違うが、同じく長物を扱うということで棒術に関しても一応の心得はある
だが……
「千景ちゃん。か、先代勇者だって言うなら手加減は出来ないよ」
「望むところ」
若葉との模擬戦において武器破壊され、歌野との戦いで二刀流になってなお押されることがあって、そこにきて棒術。武器系統をそろえましょう。なんていう手加減は出来ない教導官として、本当なら同系統の武器を扱い、指南をしたいと思う。だが、まずは実力を知らないといけないからと、少し無理矢理に納得してみる。人間を超越した化け物などと揶揄されてはいるが、晴海はやはり人間なのだ
「千景、油断するんじゃないわよ」
「解ってるわ。そんなことをして勝てる相手には見えない」
「華奢な女の子なのに……」
「どこがよ！」
しくしくと、茶目っ気を交えて口に出す。そんな余裕の見える晴海に対して、千景は息を呑んでいつもの立ち位置へと向かう。余裕層に見えるのに隙がない。しかし、だからと言って引くわけには行かない。ここに来たのは、自分の力を知るためなのだから

「それじゃ、先攻」
どうぞ。と、手を差し向けられて千景は棒を構える。本来なら刃があるのだが、今回は無い。それはハンデのようなもので、本来引っ掛けることも切り裂くこともできるはずが、出来ない分戦い方を考えなければいけない。しかし、千景はそれを考えない。もう考えているから、考えない。あとはもう――体を動かせば良い
「――ふっ」
「！」
強く息を吐き出して、直進。踏み抜かれた砂が舞う中、千景は飛ぶように砂地を滑空し、距離を詰める。
「せぁッ！」
ヒュンッっと風を切り裂いた棒が砂地を微かに抉り飛ばしながら晴海の腹部を狙う――が、反発する強い金属音が鳴り響き、棒の先端は砂地へと叩き落されていく。その瞬間、ほんの一瞬だが晴海の刀が煌く
「くっ！」
それが刀の向きを変えたのだと考えることなく直感で判断し、棒の持ち手側を下へと落として一気に急上昇させると、刀と衝突。互いの武器が上下に大きく仰け反って棒の先端が着地した瞬間に手足を滑らせ、最先端を最後尾へと持ち替え晴海へと突貫する
しかし、手応えなく、飛びのく晴海の姿が千景の目に映る――そして、爆発が起きた
千景のいた場所ではなく、その前方、晴海が着地した場所で。地雷でも置かれていたかのような爆発は飛散する礫のような晴海の軌跡となって
「し――ッ！」
「ッ！」
「はぁッ！」
一度目の強打を弾き飛ばし、棒が大きく撓る。ビリビリと伝わってくる衝撃、力を揺るがす鈍痛。だが、千景は力むことなくふと息を吐いて、棒をぐるりとまわすと滑っていく棒の端を掴んで横薙ぎに振るう
鎌があれば直撃コース。晴海もそれがわかっているからか、棒の横っ腹を刀で突き弾くと、ぐるりと体を回って内側に潜り込み、肉薄
（それで上手くいくわけも無い――ッ！）
せめて一撃はと振るった刀はやはり弾かれ、追撃をもくろんだ晴海だったが、背後からの悪寒に頭を下げ――瞬間、千景の棒が真上を通り過ぎてまた、千景が舞う。円を描くその機動はコンパスのように正確に動き、内部に佇む晴海へと容赦なく降りぬかれたが、それを抜き出した鞘で防いで、飛び退く
「早い」
歌野と同様の反応をするのはと思ったが、それしか言いようが無かった。一手一手の速度が速く、弾き飛ばしても戻ってくる。狙いは性格で、刃があれば直撃、無くても直撃の

嫌な距離感

（流石に勝てない……？）

武器破壊での引き分け。先代勇者との戦いはそればかりで、自分の弱さが露呈していく。そんな教導官としてみっともない戦いばかりで。と、晴海は歯を食い縛る。戦いを教える中で、自分に勝ちぬくことが出来た相手はいない。例外があるとすれば、兄と共同で教えた天乃くらいで。その天乃も今は自分の相手は出来るような状態ではない。だからと怠った鍛錬は基礎鍛錬すらない。しかし、自分よりも上がいないから、自分と拮抗する相手がいないから、結局自分の成長は止まったままだったのだと、晴海は悔いる。夏凜も成長している、いずれ自分よりも強くなってくれるだろう。だが、今必要だったのだ

「ふふっ……さすが、さすが先代」

激しい運動をしているからか、心臓がバクバクと唸る、叫ぶ。その内部の痛みが際限なく心地良い。夏場ゆえの灼熱、噴出す汗が風に拭われていく心地よさ。目の前の、棒術へと切り替わった先代勇者の力強い瞳。晴海は、笑う

「良いわ、もっと。千景ちゃん。鎌を出して」

「……平気？」

「千景ちゃんの技量なら寸止めも出来るだろうし、その緊迫感が今は欲しい」

「私の模擬戦かと思っていたけれど……」

輝だらけの棒を一瞥した千景は、危険性を不安視しながらも、棒を捨てどこからとも泣く真っ黒の危うさに満ちた鎌を取り出す。棒よりも僅かに長く、大きい。禍々しい気配を放つそれを前に、晴海は笑みを携え、頷く

「少し手を」

千景の指示に従って晴海が手を出すと、千景はその手に鎌の刃先を怪我しない程度の優しさで触れさせる。しかし、晴海は痛みも何か変な状態異常も感じず、驚いたように目を見開く。だが、千景は納得したように頷いて

「通常の人は傷つけることが出来ないようね……けど、三好さ……夏凜達が勇者の状態だときっと大変なことになるわ」

千景の鎌は、何の力も無い普通の人間に対してはほぼ無害—牽制程度—だが、精霊や夏凜達勇者、そして当然のごとく神樹様に対しては絶大な威力を誇る。というのも、千景の力は神の力に対してのものだからだ。ゆえに、夏凜達勇者に関しては一時的に勇者になれなくなるなどの弊害はあるだろうが、一般人含めて体への害は倦怠感などの精神的な部分になる

「これで、心置きなく貴女を斬れる」

「やられないわよ」

しきりなおし。そう言ってまた最初のスタート地点に戻っていく二人を、夏凜と、遅れて合流してきた樹と友奈が見守る。鍛錬もすべきだが、模擬戦を見るのも重要だからだ

「……」
「……」
潮風が流れていく。波がさざめき、虫が鳴く。どこかを車が通っていき、子供達の声がどこかから聞こえてくる。鎌を持った千景と、納刀し、抜刀の構えで待機する晴海は互いを見つめあう。見るだけでは地味にも思えるが、夏凜は思わず息を呑み、頬を伝う汗を拭う。底なしの崖下を覗いているかのような、血の気が引いた冷めた感覚、音が聞こえなくなって視野が狭くなって、ドキドキと高鳴る鼓動だけが耳に残る。そして、一際大きな風が吹き、木々が横薙ぎに奪われた葉を追うように傾いた瞬間――晴海が動く
「んッ！」
砂埃が舞い上がってギャラリーから見えなくなった砂嵐の中で、ギャリギャリと削れて行くような鈍い金属音が響き、続けざまにヒュインッっという不可思議な音が聞こえて、金属の弾けあう甲高い音が連続する。そして、晴海が後ろに飛びのき、ほぼ同時に下段から切り上げる禍々しい鎌が空間を引き裂いて千景が飛び出す。
「ッ！」
その勢いのまま、空いていた右手を鎌へと伸ばして持ち替え、地を蹴りだして差し迫ると、もう一度下段から振り上げていく。だが、当たらない。晴海の攻撃も当たらない。リーチが違うという条件下で、自分の攻撃が掠りさえしないことに、千景は総合的に見れば自分が劣勢なのだと、歯噛みする。その一瞬の隙に割り込んだ光が――千景の耳のすぐ上、僅かな髪を切り落とす。
（不味いわ……ッ！）
鬼のような形相で刀を細剣のように連続で突き出してくる晴海の連撃をギリギリで弾きながら、千景は焦り、はやる気持ちを押さえ込んでゆっくりと後退していく。それでも晴海の追いはぎの勢いは留まることなく……そして、晴海の刀が引き戻った瞬間に動く。柄の上に手を滑らせ、流れるように逆手へと持ち替え、一閃。当然のように弾かれながら右回りに体を回しつつ横薙ぎに切り裂き、弾かれ、上段からの斬り落とし……もまた、弾かれる
「はっはっ……っ」
乱れた呼吸を吸う瞬のうちに整えながら、鎌の有効範囲外にまで距離を取った晴海へと目を向ける。晴海の身体的にはダメージもなく問題ないように見えるが、肩の上下はわかる。汗をかいているのも解る。それでも緊張感は解けず、藁でも木でも煉瓦でもなさそうな頑丈な壁を前にした狼のように、千景は殺意にも似た感情をむき出しにして、刃を下へと傾け、鎌を斜めに構える
「――行くわ」
けりだした瞬間からぐるりと体を半転させ、勢いを上乗せした鎌を横に振るい、接近した瞬間に斜め上から斬り下ろす。手応えはない。金属音も。躱されたのだと全てが物語る中、真冬の旋風のような凍てつく何かを感じて、鎌を出す

「！？」
重い衝撃が柄を打ち貫いて肉を震わせ骨を穿つ。その鈍痛に空気が押し出されていくのと同時に、浮遊感を感じて、千景はとっさに鎌を砂場へと差し向けたが――遅い
「ふっ！」
鎌への重みが消えた瞬間に、追い討ちのようにさらに重い衝撃が加わって体が浮く。否、打ち飛ばされていく。野球というものを千景は良く知らないが、その打球のようだと、千景は思った。残る圧迫感、力は入っているのに入っていないような感覚乖離した両手足、心もとない浮遊感、離れていく晴海の姿はまた追撃の姿勢へと変わり、前傾姿勢に切り替わっていく。納刀された刀、その柄がゆっくりと斜めになって――
「――しっ」
「っ！」
地に足の着いていない状況下でのガードほど馬鹿げたものはない、弾き飛ばされに行くようなもので、また相手の攻撃を受ける側に回るだけ。ならば、どうするか……
（私はもう人間じゃない……精霊になった。なら、それなら。乃木さんの言うような、あの時代の私が好んでいたというゲーム。それの全てが出来るとは思えないけど……そんな、超人的な戦い方が……）
その逡巡の合間にも差し迫る晴海の刀に柄を衝突させた千景は、その鈍痛を堪え、足場として後退するのではなく、あえて前のめりに飛びこんで、晴海の背後へと着地して――背後への一閃
「……」
「……」
ガチリと、金属のせめぎあう音が聞こえた。拮抗する力の押し合いに削れ合う音が聞こえる。ここまで来てなお攻め切れなかった千景は、鎌を消滅させ、ゆっくりと立ち上がる
「……さすが、教導官を担っているだけのことはあるわ」
「流石に危なかったわ。それが非殺傷でよかったって思った」
そう言った晴海は布の裂けた腹部を千景へと見せて、苦笑する。当たっていても致命傷にはならなかっただろうが、多少でも動きは鈍ることになっていた部分。非殺傷だからこそ無傷で拮抗できたが、でなければ最後は押し負けていてもおかしくはなかった
「千景ちゃん、貴女の――」
「引き分けよ。そんなかすり傷では、貴女に勝てたとは言えない」
「……そう」
リーチの差があって、なお、この程度でしかなかったのだ。賞賛されても受け取る気にはなれない。と、千景は晴海の困った呟きに「そう……」と、呟き返す。本当なら、もっとダメージを与えられなければいけなかった。晴海はやはり、人間なのだから。
「感覚を取り戻すには良い戦いだったわ……ありがとう」
「こちらこそ。歌野ちゃんでもそうだったけど。自分がまだ未熟だと解るから、助かるわ」

「……まだ強くなる気なの？」
「凄いよね、私ももっと強くなりたいよ」
　呆れたように零す夏凜に、友奈は嬉しそうな声でき、握りこぶしを作っては解き、作っては解く。色々な感情が積み重なって、天乃に対しても歯向かうように戦ってしまったあの模擬戦。あの頃のようにはならないし、そんな頃よりも自分の力は増していると感じるが、それでもまだ、力不足だと友奈は思う。味覚を失って、入院中に預けていた端末は調整を施されたからか、新しく火車という猫のような精霊が追加された。
　炎属性の追加のほか、一つ一つの攻撃の破壊力も上昇させてくれている分、強い力だと言える。だが、それは付加される能力が向上したというだけの話であって、友奈自信の単純な戦闘能力が高くなったわけではない。強い力を得たからこそ、その分自分も強くなければいけないのだと、友奈は気持ちが急くのを感じて首を振る
「友奈さん？」
「大丈夫だよ。樹ちゃん。千景さんも、若葉さんも、歌野さんも、タマ先輩もみんな強くて、凄い憧れる。早くあの背中に追いつきたいって、凄く、心がドキドキしてる。でも、だからって無茶はしない、良く解らないなにかに頼って、ただ、闇雲に頑張るだけじゃダメだって、一番遠くて一番近づきたい久遠先輩が教えてくれたことだから」
　友奈は珍しく大人びた、物思いに耽る愁いを帯びた笑みを浮かべながら、自分の膨らみかけの胸元に手を宛がうと、そう零す
（あんなことがあって、学んだ大事なこと。絶対に忘れちゃいけないことだ……！）
　その強い意志を感じる友奈の横顔に、樹はやっぱり先輩なんだな。と、思って自分も頑張ろうと意気込む。樹は晴海に鍛錬を頼むのと同時に、同系統に近い武器を扱う歌野にも、その武器の扱い方を習い始めている。今日は歌野がいないので、晴海に習う日だ。と言っても、晴海の時は基礎鍛錬—筋力や体力向上を目的としたもの—が基本的な内容になるが。
「お姉ちゃん達も呼ぼうかな」
「一人でその大人数は……そうだ。この前乱入してきた人をそろそろ正式に呼ぼうかしら」
「えっ？」
「とっても頼りになるわよ。まぁ、妹の……樹ちゃん。夏凜ちゃんは気をつけたほうが良いけど」
　悪魔のような悪戯な笑みを浮かべる晴海に、夏凜だけがあからさまに嫌そうな顔をして。樹の「なんですか？ なんなんですか？」という不安にまみれた問いかけが、砂浜に悲しく響く